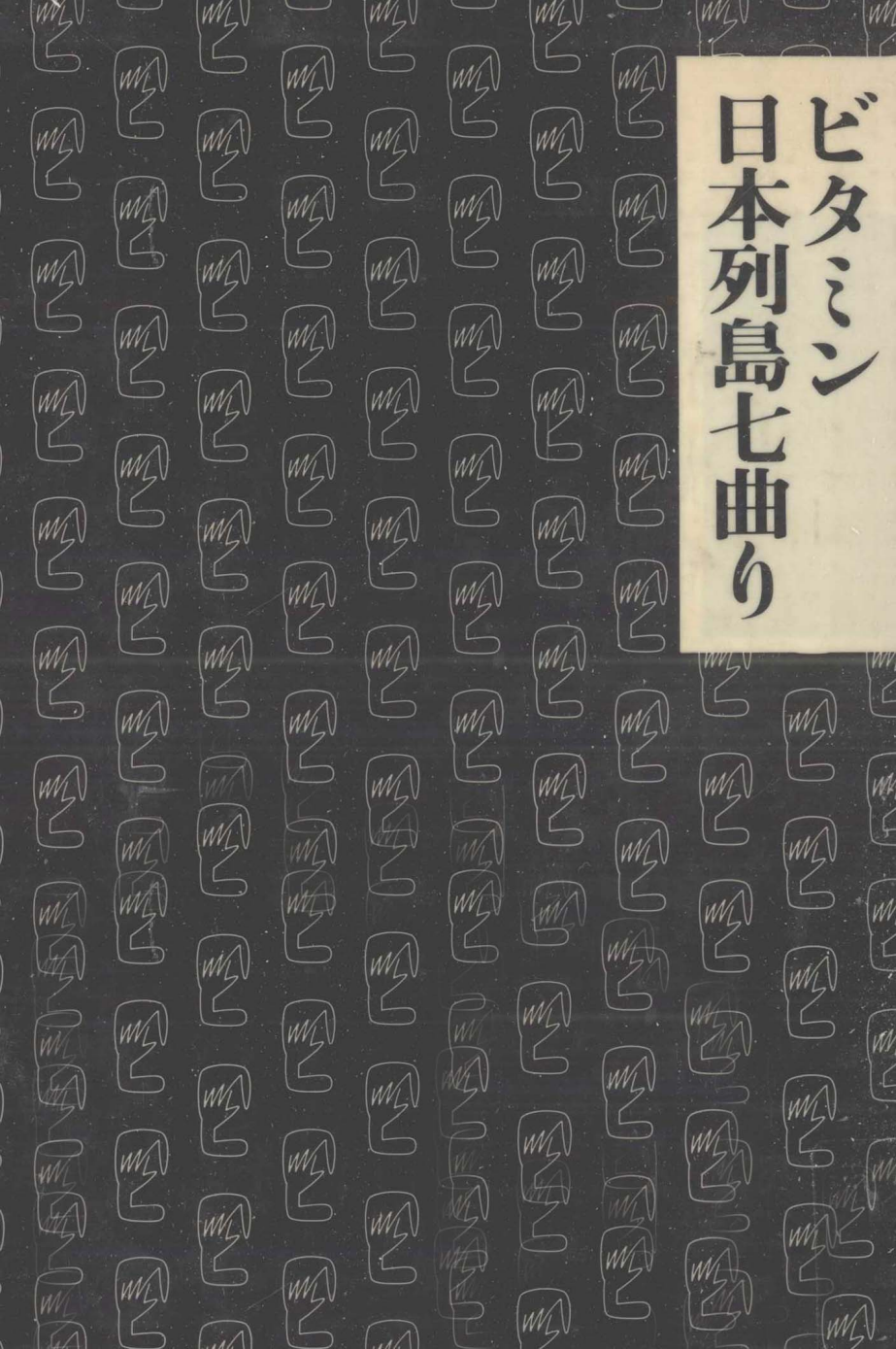


ビタミン
日本列島七曲り





筒井康隆全集 9

ビタミン
日本列島七曲り

新潮社

ビタミン・^{にほんれつとうなまが}日本列島七曲り

筒井康隆全集 第9巻

昭和五十八年十二月二十日 印刷
昭和五十八年十二月二十五日 発行

定価一五〇〇円

著者 筒井 康隆

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一(〒一六二)

電話 業務部 東京(〇三)二六六一五一一

編集部 東京(〇三)二六六一五四一一

振替 東京 四一八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

筒井康隆全集第九卷・目次

短 篇

欠陥バスの突撃……………	9	深夜の万国博……………	169
となり組文芸……………	24	人類の大不調和……………	184
息子は神様……………	40	ビタミン……………	192
たぬきの方程式……………	51	岩見重太郎……………	210
夜を走る……………	63	児 雷 也……………	216
肥 満 考……………	92	正 義……………	221
猛烈社員無頼控……………	105	癌……………	222
逃げるや逃げる……………	111	日本列島七曲り……………	223
横車の大八……………	126	見 学……………	236
代用女房始末……………	141	傷ついたのは誰の心……………	237
空想の起源と進化……………	143	タ バ コ……………	240
20000トンの精液……………	156	訓 練……………	241

2001年公害の旅……………242

誘拐横丁……………246

ふたりの秘書……………261

夫婦……………275

エッセイ

出版部K嬢へ……………315

曾野綾子讃……………317

よろめき……………318

EXPO'70ヒット・ユーモア・ベスト10……………320

ゴダールの娯楽性……………323

〔未完稿〕マルクス・エンゲルス………335

の中共珍道中

モーツァルト伝……………276

公害浦島視機関……………280

テレビ譚妄症……………296

人間を無気力にするコンピュータ……………324

SF・中間小説・前衛ジャズその他及び筒井康隆の現状について……………328

いたかつただらうな……………331

ぼくの好きなジョーク……………333

〔補遺〕

悪口雑言罵詈譏私論…………… 338

産科血笑録…………… 345

解説

オヤジは憎まれない…………… 348

亀和田 武…………… 351

ビタミン・日本列島七曲り

装
幀

山
藤
章
二

短

篇

欠陥バスの突撃

「おいっ。どうした。もうこれ以上スピードは出ねえのか」

シートから立ちあがって、そうわめいた中年男。この中年男は見るからに好色そうな顔つきをしていた。いや、まさに情欲そのものという顔つきをしていた。それは額に傷痕のある小肥りの中年男だった。

中年男は、バスの乗客全員から「色情」という名をあたえられていた。それもその筈だった。なかばずりおろされたズボンから露出している彼のベニスは、のべつ勃起し続けていた。そして彼自身、それを隠そうともしていなかったのである。

「しかしねえ。この、靖子って娘を姦^やつちまうのは、どう考えても危^ないぜ。だって課長の遠縁なんだからなあ」額に傷痕^{きずあと}があり、顔色が悪く、皆から「サラリーマン根性」の名をもらっている若い男がいった。「敬遠^{けいえん}しといった方が、いいんじゃないかねあ」

「馬鹿野郎」色情がふり向いて大きく怒鳴った。「お前

らのいうことをいちいち聞いてた日にゃあ、いつまで経っても、女ひとりものにできやしねえ」

「そんなに女が欲しいなら、早く結婚すればよいのじゃ」運転席に近い窓ぎわのシートにかけていた、額に傷痕のある「老人」がいった。「母上が郷里から、見合い写真を送ってきておられるではないか」

「結婚して、生活できるかよう」赤シャツにチェックの背広を、いかにも身をもち崩した感じにだらしなく着て、額に傷痕のある「放蕩」が叫んだ。

最後尾シートの「計算機」が立ちあがり、傷痕のある白哲^{せきせき}の額にばらりと垂れた前髪を神経質そうにかきあげ、眼鼻立ち整った無表情な顔のまま、とり出したメモを感情のこもらぬ声で読みあげた。「月づきのサラリー四万八千五百円。アパートの部屋代一万五百円。食費他二万円。洋服屋未払分八万九千円。友人からの借金五万円。……」

その時、バスの天井数力所についているスピーカーから、若い女の声が甘ったるく流れてきた。

「ねえ、司郎さん。このお店、混んできたわね」

「うん。そうだね」「サラリーマン根性」の隣のシートで車内にひとつしかないワイヤレス・マイクを握っていた「気障^{きざう}」が、そう答えた。これ見よがしに外人式身ごなしをするのだが、額の傷痕と、中肉中背のからだつきがそれには不似合いだった。「じゃ、どこか他の店へ移ろうか」

「サラリーマン根性」が、あわてて「気障」にとびつき、彼の手の中のマイクをもぎとりながら小声で叫んだ。「ばか。ばか。そんなこといって、よその店へ行くだけの金があるのかよう」

「現在の所持金」また立ちあがり「計算機」がメモを読みあげた。「三千八百円。この喫茶店の勘定、コーヒー一杯フルーツボンチひとつ。合計三百二十円」

「そんなに残ってるんなら、つれこみホテルへしけ込める」しめたとばかり「色情」が大声を出した。

「サラリーマン根性」は仰天し、マイクに掌を押しあてて「色情」を睨みつけた。「しっ、聞こえたらどうする」

「とにかく、このお店を出ない」ふたたび、スピーカーから靖子の声が流れ出た。

「そ、そうですね」「サラリーマン根性」はしかたなしに、手の中のマイクへ答えた。「じゃ、出ましょうか」

「気障」があきれて、ゆっくりとかぶりを振った。「そんな頼りない返事してたのじゃ、とても、ものにできないよ」

「色情」があせって、「サラリーマン根性」のマイクをもぎとろうとした。「おれによこせ。はつきり、ホテルへ行って寝ようといつてやる」

「そんなこといってたら大変だ」「サラリーマン根性」は蒼くなり、「色情」と揉みあいながらいった。「おい。みんなこいつをそっちへつれて行ってくれ。こいつにマイクを渡

したら、靖子に何をいうか、わかったもんじゃないぞ」

「まったくだ」

「気障」、「創造」、「知識」、その他数人が、荒れ狂う「色情」を手とり足とり、バスの最後尾へひきずっていった。

十八人の人間を乗せたその欠陥バスは今、光の乱舞と騒音の洪水の中を出はずれレモンの月に照らし出された荒涼たる夜の中に走りこんでいった。欠陥バスのくせに、彼はスピードをあげ、今までに数台の車を追い越していた。あるいはそれは、彼が欠陥バスであるが故に、すれ違う車の方で恐れをなし、わざとスピードを落して身を避けてくれたのかもしれないが、そんなことは欠陥バスの知ったことではない。そんなことさえ考えようとしなくていい。欠陥バスの欠陥バスたるゆえんなのだから。いつもそうなのだが、欠陥バスは自分のことを考えるだけでせいっぱいなのだから。

乗客十八人の中には「老人」もいたし、また「子供」もいた。だが、圧倒的に多いのは二十歳代後半から三十歳代前半にかけての青年、中年の男性だった。「アニマ」と、皆から呼ばれている女性もひとり、混っていた。彼女はハイティーンで、黄色いワンピースを着ていた。(註・『アニマ』は心理学用語。男性の肉体中にある少数女性遺伝原質の精神的表現。一般には無意識の一部を擬人化したもの)全員、それぞれ年齢も性格も大きく違っているくせに、

どことなく似たところがあった。あるひとつの基本的な顔かたちを、それぞれの年齢や性格に応じて加工修正したかのようでもあった。乗客だけでなく、運転手も似ていた。もしかすると運転手の顔こそ、乗客たちの顔の基本形なのかもしれない。

運転手は、三十歳くらいで、額に傷痕のある、やや悲しげな顔をした男だったが、見たたによつては、ずいぶん若く見えた。彼の持病は膝関節炎だった。季節の変わりめとか、雨の降った夜とか、疲労のはげしい時に出るのである。

車掌はいなかった。むしろ、十八人の乗客すべてが車掌といえた。彼らは勝手なことをいつては運転手に指示をあたえていた。十八人の合意が、バスの行く先を決めているのである。運転手は目的地を知らなかった。目的地の決定は乗客たちの間で、まだ合意に達していなかったのだ。

「もう、だいたい夜がふけた」と、〈老人〉がいった。「この娘さん、早くお送りした方がよいじゃろ。親御さんがきつと、ご心配じゃろうからな」

「まだ十時じゃねえか」と〈放蕩〉がいった。「それにこの女はもう二十二歳なんだ。子供じゃねえんだぞ」

「では、少しこの道を歩きましょう」と〈気障〉がマイクに、きざつぽくささやいた。「夜風に吹かれて」

「そうね」靖子の声がスピーカーから出てきた。「ああ、とてもいい気持だわ」

「まだ、歩くつもりか」〈食欲〉が悲鳴をあげた。「おれは腹がべこべこなんだぞ。もう歩けないよ。何か食わせてくれ」

「いや。この女を姦るのが先だ」最後尾で、皆から押えつけられたままの〈色情〉が叫んだ。「さあ。早くホテルへ誘え。早くしろ早く」

「男性というものは」〈知識〉がおもむろに喋り出した。「食欲が満たされている時よりも空腹時の方が、女性を魅力的に感じるものなのである。即ち、一九六五年米国はコロンビア大学に於て、男女学生各二百名を対象に行った調査によると……」

「こんな娘、ちつとも魅力的なんかじゃないわよ」と〈アニマ〉が叫んだ。唇を歪めていた。「女らしいところが、ひとつもないじゃないの」

「うるさい。おカマは黙っている」と〈放蕩〉がいった。「おカマじゃないわ」〈アニマ〉は絶叫し、たちまち眼を吊りあげ、泣き声で罵った。「何も知らないで、何さ。バカ。おカマじゃないわよ。わたしは女よ。わたしは女よ」シートの中の凭れに突伏し、さめざめと泣きはじめた。

「おい。黙ったまま、並んで歩いてるだけじゃ、退屈させちまうぞ」〈サービス〉が〈気障〉にいった。「何か気のきいたこと、喋れないのか」

〈気障〉が答えた。「この娘の方から、何かいい出すのを

待つてゐるんだがね」

「そうだ。男はお喋りでない方が、男らしくてよい」と
《批判》がいった。

「いや。それじゃ駄目だ」《放蕩》がいった。「おれによ
こせ」彼は《気障》の手からマイクをもぎとり、崩れた口
調でゆっくりといった。「どうだい。一杯飲みに行かねえ
かい。この近所に、ちよつといけるおでん屋があるんだが
ね」

《気障》が、顔色を変えた。「こら。おれのせつかく作つ
たムードが台なしだ」

「あのおでん屋の親爺とは、勘定のことでの間喧嘩した
ばかりじゃないか」《サラリーマン根性》が、押えつけて
いた《色情》からはなれて《放蕩》の傍らまですつとんて
きた。「あんな品のない店へつれて行っちゃいかん」

「あらあ。司郎さんったら、そんなお店知つての」スピ
ーカーの靖子の声は、とたんに嬉しそうに弾んだ。「面白
そうね。行きたいわあ」

「ほら見ろ。喜んではやねえか」《放蕩》は自慢そうに、
全員の顔を眺めまわした。「とかく女てえのは、男の行く
場所を覗きたがるものなんだ」

「そうだ。そこへつれて行け」《色情》が最後尾で叫んだ。

「その店で焼酎を飲ませて、ぐでんぐでんに酔わせるんだ。
そしてホテルへしけこめ。あとはもう、思いのままじゃね

えか」

「早く行こう」と《食欲》がいった。「早くおでんが食い
たい」

「ひ、冷やの焼酎……コ、コップにいっぱい……きゆうつ
と、は、は、早くの、飲みてえなあ」窓ぎわの席の《アル
中》が、ひと声寝呆け声でそう叫び、ふたたび窓ガラスに
額の傷痕を押しあてて寝てしまった。

「でも……」靖子がためらい勝ちにいった。「そういうお
店つてのは、だいたい、不潔なんですよ」

「そ、そうですとも、そうですとも。不潔ですとも」《サ
ラリーマン根性》が《放蕩》からとりあげたマイクに向か
つて、大あわてで答えた。「そりやあもう、とてつもなく
汚いところですよ」

「そう。とても君をつれて行けるようなところじゃない
よ」横から《気障》が、マイクにいった。「君のような、
おとなしいお嬢さんをね」

「ああら。わたしって、そんなにお嬢さんに見えるのかし
ら」表面的には不満そうに、それでもお嬢さんといわれた
ことがまんざらでもなさそうな口調で、靖子はそう訊ね返
した。

「いやな女」《アニマ》が吐き捨てるようにいった。「気取
つてゐるわ」

《自虐》が、ゆっくりと自分の席から離れ、バスの中央の

通路を歩いて「サラリーマン根性」の傍らに立ち、彼の手からマイクをもぎとって直立不動の姿勢をとり、悲痛な声で喋りはじめた。

「その不潔な場所へ、ぼくはいつもひとりで行く。ひとりで焼酎をおろすのだ。酔っぱらい、掃り道で地べたに寝てしまうこともある。泥にまみれ、反吐にまみれて……」

「よせ」「サラリーマン根性」がマイクを取り戻した。「そんなこと、課長に喋られてみろ。昇進できなくなるぞ」

「まあ、可哀想」と、靖子はいった。「どうしてそんなに、自分を苛めるの」

「なるほど。同情をひくという手もあったなあ」「批判」が、にやにやしながらうなずいた。

「なんとか、うまくごまかしてくれ」「サラリーマン根性」は、あわてて「創造」にいった。「お得意のたため話を、ひとつでつちあげて、なんとか胡麻化してくれ」

「創造」は、怠惰な身ぶりで答えた。「でたらめ話なんて、簡単にいうがね、そのでたらめ話をでつちあげるの、なかなかむずかしいんだぜ」

「すまん、すまん。気にしないでくれ」「サラリーマン根性」は、すぐにべこべこあやまった。「さあ。そんなにもつたいぶらないでとにかく、何か一席、弁じてくれよ。早く早く」

「創造」は、いやいやマイクをとり、だるそうな声で喋り

はじめた。「靖子さん。ぼくはいつも、自分とあなたを比較するたびに、絶望的なほどの大きな距離を感じてしまうのだ。だからこそ、無理やり自分を孤独に陥らせ、自分を責め、自分のからだを苛めたくなるんだ。なぜだと思う。それはぼくが、君を愛しているからだよ。そして君は、ぼくを愛してくれてはいない」

「あつ。馬鹿ばか。もう、愛の告白をしちまいがった」「気障」が、あわててそう叫んだ。「靖子がまだ、それを期待してもいないのに。告白なんてものは最近では、女が男に、告白させるよう仕向けることになっているんだぞ」

「しかし、話としては、愛しているといた方がずっと迫力が出るじゃないか」「創造」はマイクを手で押え、不満そうに「気障」にいった。

「ふん。それはもつと、うまい表現で告白した時の話だ」と「批判」がいった。「君は現実と作り話の区別さえつかないのかね。それじゃ真の創作はおぼつかないよ」

「ほうら。靖子が黙つちまった」天井のスピーカーを見あげ、心配そうな表情で「サラリーマン根性」がいった。

「きつと、気を悪くしたんだぞ」

「なあに。愛の告白をされて気を悪くする女がいたら、お目にかかりたいもんだね」「放蕩」がいった。

「きつと感激してるんだよ。だから黙ってるんだ」「創造」は自信满满でそういいながら、自分にうなずいた。

「腹がへったあ」と「食欲」がいった。「どうするんだよう。おでん屋へ行くのか、行かねえのか」

「ねえ。今いったこと、それ、本気なの」と靖子が真剣な声で訊ねた。

「ほうら。やつぱり今まで、感激していたんだ」〈創造〉が、鼻をうごめかした。

「そうじゃない。だしぬけに告白されたからショックだったんだよ」と、〈サラリーマン根性〉がいった。「さあ。どう返事するつもりだ。下手な返事はできない。むずかしくなってきたぞ」

「今のは出たらめだといいなさい。嘘だったといいなさい。正直に」〈老人〉が立ちあがり、そう叫んだ。「このお嬢さんを、本気で愛してなんか、おりやせんじやろうが。お前らはこのお嬢さんの、美しい肉体がほしいというだけじやろうが。純真な娘さんを騙すなど、もつてのほかじや。正直にそう答えて、あやまりなさい。さあ、早くせんか」

「ちっ、馬鹿だなあ。そんなこといったらこの女、よけいにかんかんに怒って、家へ帰っちまうぜ」と、〈放蕩〉が苦笑した。「侮辱されたと思つてね。いや、もつと悪い。茶化されたと思うかもしれねえ」

「なぜぼくは、愛してるなんて口走ってしまったんだろう」マイクに向かい〈気障〉が、いかにも自己の内心を見つめようとしているかの如く、深刻そうな口調でいった。

「きつと、今夜のぼくは、どうかしているんだ。きつとそうだ」

〈気障〉はそういう終り、われながらうまくいったという顔つきで、誇らしげに全員顔を睨まわしてから、ゆつくりとマイクを〈サラリーマン根性〉に戻した。〈批判〉が、ふんと大っぴらに鼻で笑った。

「ほんとよ。今夜の司郎さんって、少しおかしいわ」スピーカーの中の靖子の声が、可愛くほころびた。「まるで、ひとりの司郎さんの中に、何人もの別の人が住んでいて、かわるがわる喋ってるみたい」

「そ、そうなんです」〈サラリーマン根性〉がうろたえて、助けを求める眼で、あたりをきよろきよろ見まわしながらけんめいに喋った。「ぼ、ぼ、ぼくの中には、たくさんの人間、十八人の人間がいるんです。バ、バスに乗ってるみたいだね。気障なやつもいますし、アル中もいますし、放蕩者もいますし……」彼はちらと〈色情〉に眼をやり、あわててそつぽを向いた。「そ、それから、それから……」

「で、今喋ってるのは、だあれ」くすくす笑いながら靖子が訊ねた。

「サ、サラリーマン根性」

靖子は、ぶつと吹き出した。しばらく笑い続けた。

〈サラリーマン根性〉は、気を悪くした様子もなく、ハンカチを出して、どつと吹き出た汗を拭いはじめた。